地域教材で日韓交流を学ぶ
ー生徒と学ぶ「四面石塔」の謎ー

愛沢伸雄

1. 生徒が主役の社会科授業をめざして

本校は，房総半島の最南端鴨川市（人口3万）にある千名近くの生徒が学ぶ全日制普通高校で，生徒の進路は9割が上級学校をめざす。私はこの春，定期異動で本校に赴任し，本来の専門科目は世界史であるが，1年生の「現代社会」（週4時間）を4クラス（162名）を担当している。

年度当初，生徒が中学校での社会科についてどんな意識をもっているかを調査した。特徴的であったのは，半数は社会科は嫌いと答え，なかでも歴史科目を嫌っているものが多い。社会科が好きで得意な生徒とは，事項を覚えたり暗記そのものが好きであったり，なおかつテストの点数が良かったものである。前任校でも毎年アンケートを試みてきたが，年々社会科嫌いが多くなっているように感じる。生徒たちの問題というよりは，地域の多くの中学校の社会科学習で，相変わらずの高校受験にあわせた暗記中心の授業の姿が浮かび上がってくるのである。このように社会科嫌いが多い生徒たちが，高校スタート時の社会科である「現代社会」において，社会科学習の楽しさを知り，学ぶことの意義をしっかりと身につけていってほしいと願う。

この報告は，生徒たちが身近にある地域教材を通じて課題テーマをつくり，19時間の調べ学習をしながら，授業のまとめでは書く力を身につけるために小論文作成に取り組んだ授業実践の一部である。実践のねらいは，まず第1に図書室での「調べ学習」を中心にして，生徒自らが主体的に学習課題を探し出し，その課題を追求するなかでさまざまな身のまわりの認識を変えていくこととした。第2には，取り上げた教科書の単元は「『現代社会における人間と文化』文化交流と国際理解」であるが，身近なことから国際交流を考えるために，地域にある歴史的な資料を学ぶことで，国際交流にふさわしい地域認識を育てることとした。

2. テーマを追求する調べ学習から小論文の作成を－19時間の授業構成と小論文指導

第1学期中間考査以降，「『現代社会における人間と文化』文化交流と国際理解」を取り上げることにした。ところで来る2002年は「日韓ワールド・サッカー」という国際的なイベントが日韓共同開催となるので，日韓（朝）の国際交流を視点にして地域からの国際化のあり方を探ることにした。ところで，中学校歴史教科書問題はアジア世界の一員としての日本のあり様を考えさせるとともに，とくに日韓（朝）の交流の歴史を考える機会となった。現代社会という今を学ぶものとして，過去の歴史的事実を直視しながら，日韓関係が「近くて＜近い国＞になる」ためにはどうしたらよいか，日本に住む人間として，どんな文化交流と国際理解が必要かを歴史的な事実から振り返ってみたい。

はじめに授業教材を検討した。課題テーマを設定し追求するために，まず生徒たちが興味・関心をもつ内容の歴史的な教材を考えた。同時に，テーマを見つけることに時間がかかっても，小論文作成において，生徒の調べ学習の姿勢が反映し，学習の達成感が感じられていくような教材を想定した。

そこで以前より，私自身が調査研究している地域の文化財を取り上げることとした。千葉県館山市の大巌院という浄土宗の寺院にある，石塔の四面に4種類の字形で「南無阿弥陀仏」を刻んだ「名号石塔」という文化財である。この石塔は不明なことが多く史料もない謎に満ちたものであるが，生徒たちがさまざまな考察をし，主体的な調べ学習と日韓の国際交流のあり方を考えるにふさわしい内容をもった地域教材と判断した。

＜授業構成＞

1時間目　「真の国際化とは（文化交流と国際理解）」を考える・・・・2002年ワールドカップと日韓（朝）交流
2時間目　地域にある交流を伝える歴史的遺産を紹介する。プリント「四面石塔」をみて石塔のことを推する
　　「私は四面石塔をこう推定する」提出
　　クラスみんなの意見　「謎の四面石塔をこう見た」報告と発表，意見交流
3時間目　図書室調べ学習（a）
4時間目　テーマ設定準備「四面石塔の謎－テーマを決める」
　～　　参考資料プリント配布共通の調査
6時間目　（1）年表作成　「四面石塔建立の時代の年表を作る」提出
　　（2）仏教関係　「仏教や時代の歴史事項を調べる」　　提出
7時間目　HR教室－「テーマ設定」の予備調査－提出プリントと学習のチェック
8時間目　図書室調査学習（b）「テーマ設定」と調査項目の検討・書籍資料確認
　～
10時間　愛沢自作VTR視聴「ハングル四面石塔の謎」
11時間　図書室調べ学習（c）
　～　　調査研究
　　愛沢作成雄誉上人年表
14時間　「調査研究ファイル」の配布
15時間　HR教室－「調査研究ファイル」のチェック・参考資料愛沢論文配布
16時間　小論文作成
～　　作成上の注意－専用原稿2枚（2400字）配布
19時間　小論文と「調査研究ファイル」一式の提出（期末考査時間）

3.　大巌院の「四面石塔」の謎を地域教材に
－私たちの地域から東アジア世界と日韓交流を学ぶ

近年，地域の歴史を中央の支配権力からの視点，つまりの日本列島規模の歴史が地域を動かしていたという視点ではなく，地域のなかでの出来事や文化があり，その地域ごとの独特な個別な世界が中央を揺り動かすという形で中央の歴史が動いていたと捉える視点が歴史学分野の主流になりつつある。つまり，日本列島の全体像があるのではなく，地域像から逆に全体像というものを見ていく観点がもとめられている。地域像を明らかにしていくうえで，地域にある歴史・文化・文化財などが，改めて地域史の研究対象として位置づけられてきた。そのような観点は，すでに先進的な歴史教育実践において取り組まれており，本実践においても近年の地域史の観点から調査検討し，教材研究とした。

まず，大巌院にある千葉県指定有形文化財の四面名号石塔を地域教材にし，地域に生きる人

々の文化交流や平和の思いを身近なものとして，生徒たちに認識させることが大切である。授業展開では，教材に興味・関心をもたせるために，まずこの石塔建立の意味を推理させながら，時代背景や仏教に関すること，あるいは地域の歴史を主体的に調べる学習をもとめた。なかでも石塔を通じて自分の住む地域から東アジア世界との関わりや国際交流のあり方を考えることを願った。

江戸時代初期の1624（元和10）年に建立されたと思われるこの石塔は，四面に梵字（サンスクリット），篆字，和風漢字，ハングルによってそれぞれ「南無阿弥陀仏」と刻字された，日本でも大変めずらしい名号石塔である。千葉県指定有形文化財（建造物）「四面石塔附石製水向」（以下「四面石塔」と略する）については，「千葉県の文化財」において，「元和10年（1624）に雄誉霊巌上人が建立した玄武岩製の四角柱の名号石塔です。総高219センチメートルあります。東西南北の各面には，北面のインドの梵字に始まり，西面に中国の篆字，東面に朝鮮のハングル，南面に日本の和風漢字と，わが国まで仏教が伝来してきた国々の言葉で『南無阿弥陀仏』と名号が刻まれています。これは阿弥陀如来の救いの慈悲の光があまねく世界を照らしていることを表しています。このなかでハングルは，李氏朝鮮第4代王世宗が1446年に公布した『訓民正音』という文字で書かれています。それは現在使用されているハングルのもととなった古い文字で，非常に短期間で消滅したため，本家の朝鮮でも近年までよくわからなかったものです」と記載されているだけである。

まず，石塔の四面に刻まれた文字を示す。「四面石塔」の東面には，1624（元和10）年に刻まれたと思われる，現在のハングル字形と違う古い字形のハングル（以下，初期ハングルと略する）の刻字がある。このことを通じて，16世紀末から17世紀初頭の東アジア世界の日本と朝鮮との関係が，安房という地域から浮かびあがってくると考えた。結論的に私は「四面石塔」の一面に初期ハングル字形で「南無阿弥陀仏」と刻字させたなかに，秀吉の「朝鮮侵略」が関わることが暗示されていると推定した。授業のなかでは，秀吉の「朝鮮侵略」後におけるアジア世界の「善隣友好と平和」を願った石塔と大胆な推理を提示した。

大巌院石塔碑文

ところで初期ハングルが刻字されているといっても，四面に刻まれた文字以外は何もわからず，結局は推定の域をでない。ただ，北面の梵字「南無阿弥陀仏」の右側に刻字されている「寄進水向施主山村茂兵建誉超西信士栄寿信女為之逆修」とか，左側の「干時元和十年三月十四日房州山下大網村

大巌院檀蓮社雄誉（花押刻字）」の刻字に注目することで，刻まれている名号や讃偈（経文）から平和の願いや思いを推定したり，石塔建立に関わったと思われる雄誉上人やその関係者の平和の思いを調べることはできると判断した。

史料もなく謎だらけであっても，生徒たちが歴史の謎を解く楽しさや歴史的な推理の面白さをもった地域教材なので，個々に課題テーマを決めることができれば，調べ学習が十分に成り立つだろう。また，テーマを決めるにあたって大胆に推理したものであっても，「四面石塔」が製作された時代背景や，そこに関わっている人物の歴史，あるいは初期ハングルの歴史を検討することで，「善隣友好と平和」を願う石塔を浮き彫りにできると思う。さらに，雄誉上人という一人の僧侶を通して，時代の動きなかで地域から日本，朝鮮，東アジアとの交流と「善隣友好と平和」の行動を学び取っていくことができると考えた。

4.　雄誉霊巌上人とはどんな人物か

＜年　表＞

1554年　川氏一族である沼津氏勝の三男として駿河国沼津（静岡県沼津市）出生する

1559年　総国生実（千葉県千葉市）の浄土宗大巌寺（住職道誉貞把上人）に入門する

1575年　誉上人より浄土宗の教義を伝授する

1588年　大巌寺3世の住職となる（大巌寺は徳川家康の関東入国時より祈願寺であり，檀林とよばれる僧侶養成のための重要な学問所である）

1590年　大巌寺の住職やめ，修行のため奈良に旅立つ。奈良に霊巌寺を創建する（ここを拠点に3年間浄土宗の布教に努めているが，「朝鮮侵略」で拉致されてきた朝鮮人たちと接触した可能性が高い）

1593年　徳川家康から再び大巌院住職にと説得され，関東に戻る

1598年　京都伏見城にて豊臣秀吉が死去する（家康や前田利家らは朝鮮からの撤退の指示する）
家康は小西行長らに朝鮮との講和を命じ，その際に捕虜160名を送還する

1600年　（このころ「増上寺史料集」によると，雄誉上人は増上寺における徳川家の法事の席で論争となり，結局浄土宗の教義を傷つけたという大罪で大巌寺から追放とされ，その後に安房国大網に隠れ住み小さな寺をつくったという）

1603年　館山の大網村に大巌院を創建する（安房国主里見義康の寄進による。正式名は仏法山大網寺大巌院といい，京都知恩院の末寺として僧侶養成所も併設された）

1607年　雄誉は守永寺をはじめ，房総の各地に多数の寺院を創建する（この年5月に第1回の慶長度朝鮮回答兼刷還使467名が来日し，1418名の朝鮮人被虜人を連れて帰国する）

1609年　安房国主里見忠義が帰依し，大巌院に42石の朱印が与えられる。上総国佐貫城主の内藤政長から善昌寺住職にと懇願され，大巌院は弟子の霊誉にまかせ安房を離れる

1614年　里見忠義が伯耆国倉吉（鳥取県倉吉市）に改易される。雄誉上人は法然の足跡を参拝する西国行脚にむけて旅立つ（各地で寺院を創建し，再建している頃，第2回の元和三年度朝鮮回答兼刷還使が来日し，雄誉が接触している可能性が高い。西国行脚の途中では伯耆国に改易された里見忠義を訪ねている）

1619年　雄誉，西国行脚を終え上総国佐貫に到着する（西国行脚では多くの弟子を養成し，西日本各地に30余寺の創建や再興に関わり，庶民のなかに浄土宗布教を強力にすすめた）

1621年　江戸茅場町に草庵をつくっていたが，徳川水軍の長である向井忠勝から沼地をもらい，埋め立

て地を造成し，浄土宗の檀林として江戸の霊巌寺建設をはじめる

1624年　大巌院において，山村茂兵夫妻が逆修のための石塔，つまり「元和十年三月十四日」と刻字した「四面石塔」を建立する（この年12月に第3回寛永元年度朝鮮回答兼刷還使の来日となり，江戸霊巌寺が朝鮮通信使に関わった可能性がある）

1629年　霊巌寺の諸堂が完成し，佐貫の勝隆寺から本尊を移す。雄誉上人は幕府より浄土宗総本山である知恩院の第32世の住職に任命される

1633年　知恩院が大火となり，徳川家光より再建の命を受ける（大梵鐘鋳造発願をはじめ，門末寺院への勧進帳と募財をすすめる）

1636年　知恩院の大梵鐘が完成する（この年第4回寛永十三年度朝鮮通信使が来日する。のちの雄誉上人伝記によると，この時の通信使が日光参拝の帰りに大巌院を訪れたとの記載がある）

1641年　知恩院の諸堂が完成し，その落慶法要が営まれた後に，説法にために江戸に戻った88歳の雄誉上人は江戸の霊巌寺で死去する

この教材研究からわかったことは，豊臣秀吉の「朝鮮侵略」は16，17世紀の東アジア世界に大混乱を与えるとともに，日本では民衆にキリシタンや日連宗不授不施派の信仰を激増させた要因になったということである。徳川家康は地域や民衆の動きをコントロールするために，とくに貿易政策や宗教政策に力を入れた。なかでも浄土宗に帰依していた家康は，民衆に人気のあった雄誉上人の存在を大いに利用したかもしれない。と同時に，安定した外交や貿易を考えると，拉致されてきた朝鮮人たちを慎重に扱い，その対応には雄誉などの僧侶たちにその役割を命じたかもしれない。そして，何よりも平和を求めていた日本の民衆の動きをどう押さえるか，宗教的な民衆対策に腐心していた。

日本の民衆や拉致されてきた朝鮮の人々は平和を強く望んでいたし，なかでも仏教の力で平和を望んだ人物は「四面石塔」を寄進することで，苦しんでいる霊魂たちを平和な浄土で成仏させたいと願っていた。また，日本や朝鮮の民衆の共通の思いは，朝鮮通信使外交のなかにも反映したのではないか。とくに浄土宗指導者であった雄誉上人は，民衆の立場から幕府と朝鮮通信使の間に入って，重要な役割を果たした可能性があったからこそ，1624年の「四面石塔」建立があったと推察している。

5.　授業のながれ

(1)「四面石塔」から，テーマを設定し，調べる

授業の2時間目に，プリントに示した「四面石塔」をみて，各自が思ったことを自由に書かせた。

プリントの質問内容は「**右の四面石塔に刻んであることは次のことだけです。この刻んであるものからどんなことがわるか，あなたなりにその事実，あるいは推定などを書いてみてください。**」

全クラス160余名のおもだったものを6つに分けて要約してみた。

a. いつごろつくったのか

・「元和十年」と思う

・「元和十年」とは人が亡くなったときか，この塔を建てたときか

b. どこにあるのか

・「房州山下大網村大巌院」

c. **誰がつくったのか**

・「寄進」とあるので「山村茂兵」という人が建てた

・「大巌院檀蓮社雄誉」がつくったかも

・ハングルがあるので韓国の人がつくった

・「南無阿弥陀仏」とあるので仏教徒がつくった

・「大巌院檀蓮社雄誉」の名前がある

・「建誉超西信士」「栄寿信女」とある

・里見家の信仰や外交に関係している人のかも

d. **なぜそこにあるのか**

・戦争で亡くなった人たちを慰霊した碑

・「南無阿弥陀仏」と仏をまつったお墓で日韓交流を深めるため

・皆が幸せになるように願ってつくられた

・それぞれ違う国の文字があるので何かの象徴

・何かの記念に建立

e. **さまざまな推定**

・それぞれの言葉にはどんな意味があるのか

・どうして四面に刻んだのか

・文字の内容はそれぞれ同じではないか

・4面に「南無阿弥陀仏」とお経が書いてある

・「罪を皆除く」と書いてあるので皆の罪を除いてくれる

・「寄進水向」とあるので水に関係ある

・いろいろな国の人々が亡くなって合同で墓にした

・「逆修」に関係あるのか

・「罪を皆除く」と書いてあるので罪をもった人の石塔

・韓国や中国から「南無阿弥陀仏」が房総に伝わりそこから全国に広まった

・「八万四」は戦死した人の数

・方向によって文字を違えている

f. **石の四面の文字**

東面の文字:ハングルに似ている

・文字はハングルである

・甲骨文字では

南面の文字:漢字では

西面の文字:漢字に近い

・漢字になる前の文字に似ている

・「金印」の文字に似ている

・西面と南面の字が似ているので同じ内容か

北面の文字:お墓の後ろに立てる木に書いてある字の似ている

・梵字では

石塔の上部の文字：北面の文字と同じ文字か・四面すべて同じである

以上，生徒たちはさまざまに「四面石塔」の様子を推定しているが，四面の1つが漢字で「南無阿弥陀仏」という刻字なので，やはり仏教に関するお墓とか，慰霊の石塔と答えたものが多い。中学校での歴史学習では，身近にある仏教の歴史や文化などを取り上げていないのか，一般的な仏教に関する知識をもっていないと感じた。

各生徒の推定は，すぐにクラスごとにプリントにまとめ，次時に「クラスみんなの意見『謎の四面石塔をこう見た』」として報告した。授業では，特徴的な推定内容を生徒自身に発表させ，その理由も述べさせた。またそのことについて他の生徒の意見や感想も出させ，自分と違う推定の事項については，今後調べ学習をする際に参考にするようにと指示した。

4時間目からは図書室での「調べ学習」に入った。プリント「四面石塔の謎ーテーマを決める」を配布し，各人が課題テーマを考えていくために，まず3時間をかけて全体が共通の調査研究をすることにした。ひとつは年表の作成で「四面石塔建立の時代の年表を作る」とし，ふたつ目は仏教関係の基本事項を確認するために，「仏教や時代の歴史事項を調べる」とした。この2枚のプリントは提出させた。調べ学習を指導しながら気がついたことは，授業に集中できない生徒も少なくなく，やはり図書室の資料だけでは無理とわかり，わかりやすくかいた教科書や資料集からプリントを作成し参考資料とした。プリントは随時提出させ，不十分なところをチェックした。

7時間目はHR教室に戻り，いままでのプリントの提出状況を確認しながら，課題テーマのプリントを配布し各生徒に考えさせた。次時から3時間，図書室で課題テーマを考えるとともに，そのための参考文献を探すことを示唆した。

8時間目からいよいよ調べ学習のために，課題テーマの設定と調査項目の検討や参考文献の確認に入った。ここからが一番大切な作業であるので，さまざまな情報を流すことにした。なかでも5年前に作成したVTR「ハングル四面石塔の謎」を見せた。生徒たちは映像によって「四面石塔」の大きさや刻字の内容などを確認したことで，推定してきた一部のことの解答となった。視聴後，「四面石塔」の謎に対して，私自身はどう推定したかを簡単に紹介した。生徒たちには，自分の推定やクラス皆の推定意見を参考にしてテーマをつくり，資料を集めながら調べ学習によって課題を追求し，小論文にまとめていくことを指示した。

(2)小論文の分析(160名分)

小論文のなかで，小テーマとしても韓国・朝鮮関係にふれている割合を調べた

		14HR	15HR	16HR	17HR
HR人数		40名	40名	38名	42名
韓国・朝鮮関係にふれている割合		**78%**	**80%**	**76%**	**76%**
(a)「四面石塔」関係	仏教・雄誉・大巌院	17名	13名	12名	11名
(59名)	日韓交流・ハングル	7	9	7	6
(b)「雄誉・大巌院」関係	雄誉の生涯・仏教	7	11	9	18
(46名)	日韓交流・ハングル	1	2	3	3
(c)「石塔の刻字」関係	仏教・梵字	0	0	2	7
(18名)	ハングル	1	11	7	8
(d)「朝鮮・韓国」関係	秀吉の朝鮮侵略	16	9	7	6

(22名)	歴史・文化・交流	7	1	5	9
(e)「安房地域」関係 (15名)	安房歴史・里見氏・交流	3	7	9	0

6. 小論文から生徒の学習をみる

(1)事例ー鈴木亜美の場合

①初めに推定したおもなこと

・元和十年三月十四日に建てられた

・「南無阿弥陀仏」はお経でよく聞く

・お墓に刻まれている文字のようである

・面ごとに書いてあるのは，その面に対して何か意味があるのだろうか

②調査テーマー「なぜ四面に違う文字なのか」

・日本とそれぞれの国で何か交流があったのか

・石塔ができたときのそれぞれの国の出来事は

・4つの文字について詳しく調べる

③小論文題名 「なぜ四面に違う文字なのか」

はじめに

私は千葉県館山市の浄土宗大巌院にある千葉県指定有形文化財「四面石塔」を知り，いろいろな疑問が浮かんできた。そのなかで，私はそれぞれの面の文字の国と日本との関係や交流を知りたいと思い調べた。まず，それぞれの文字について知り，日本と関係の深い国について知ろうと思った。次に石塔に刻まれている「南無阿弥陀仏」についてどういう意味で，なぜその文字なのかということを調べることにした。

1．文字について

まず，それぞれの文字について知ることで，日本との間に何かあるのかということを調べた。北面の文字については「悉曇（しったん）」という。悉曇とはサンスクリット語のSiddhamの音訳であり，サンスクリットの文字を悉曇と称している。一般的にはサンスクリット文字，専門的には悉曇として使い分けられている。悉曇学というのは，中国と日本においてサンスクリット文字においてなされた文字や音声の学問という。日本語とサンスクリットとの間には，古来中国を通じて，非常に深い関係がある「南無阿弥陀仏」といった題目も本来はサンスクリットに由来している。

次に西面の文字については，漢字になる前の文字で「篆字」という。日本で使われる漢字は中国から由来してきたものである。南面の文字も日本で使われている漢字である。

そして東面の文字は朝鮮の文字で「ハングル」という。このハングルは李氏朝鮮の第4代国王世宗が1446年に公布した「訓民正音」という文字で書かれている。それは現在使用されているハングルの基となった古い文字で短期間で消滅したため朝鮮でも近年までよくわからなかったものという。このようにそれぞれの文字から中国や朝鮮と日本が何か関係があったということがわかった。

2．「南無阿弥陀仏」について

四面に刻まれている文字を解読したところ，どれも「南無阿弥陀仏」という文字ということがわかった。それはお寺などで多く耳にする言葉であったので，もっとよく知ろうと調べた。

「南無阿弥陀仏」という文字は「阿弥陀仏」に帰依するという意味で，中国唐代の高僧善導の解釈によれば，「南無」とは帰依を意味するサンスクリット語であり，仏に帰依して救いを求めようとする民衆の願い

を実現するために働く阿弥陀仏の行動を示しているという。「南無阿弥陀仏」によって，民衆の願いと仏の行動が一つになって，平和な極楽浄土で仏になることができると説いた。つまり，生命の危機や死の際に「南無阿弥陀仏」と唱えると皆が仏になり，極楽浄土で幸せになるという。

こういうことから日本や朝鮮などが阿弥陀仏の力で皆が友好で幸せになることを願い，「南無阿弥陀仏」と刻んだのではないかと，私は推定した。

3．日本と朝鮮との交流・・・・「朝鮮通信使」をみる

調べたなかで日本と朝鮮とはいろいろな交流があったとわかったが，さらに調べていくと，豊臣秀吉の「朝鮮侵略」が大きな意味をもっていると知った。1592年から96年の秀吉の「朝鮮侵略」は朝鮮の人々の心に日本人に対する憎しみを残した。しかし，江戸時代に入ると対馬藩や幕府の対応のなかで友好関係は回復する。これは朝鮮通信使の来日というかたちで実現したのであった。

この朝鮮通信使というのは，朝鮮国王が日本国王（将軍）に国書を渡すために派遣した使節である。はじまりは1404年に足利義満が朝鮮と対等な外交関係を結び，双方で国書を交換したときである。しかし，両国使節の友好的な往来は，1592年からの朝鮮侵略（文禄の役）と1597年の朝鮮再侵略（慶長の役）という一方的な侵略戦争で崩れてしまった。

江戸幕府は，こうした侵略戦争の後に友好関係を修復していくために，江戸時代を通じて朝鮮通信使を招くようになった。通信使は1607年から1624年までの国交回復・戦後処理のための使節が3回と，1636年から1811年までの将軍代替わりのときの使節が9回の合計12回である。最初の3回は日本からの使節に対する答礼の使節で，回答兼刷還使という。これは答礼を兼ねて，秀吉の「朝鮮侵略」のときに日本へ連行された多くの朝鮮人捕虜の返送を目的にしていた。捕虜には陶工や学者などが含まれていたが，彼らが江戸時代初期の技術・学問の発展に果たした役割は大変大きなものであった。この答礼のための使節が派遣される背景には，長年朝鮮と日本の間で交易を通じて文化交流を続けていた対馬藩の役割が重要であった。

また，記録によると通信使が途中で立ち寄るところでは，日本の知識人の訪問があとをたたなかったという。当時の日本において儒学の先進国である朝鮮から学びたいという意識が高かったのだろう。このことから通信使を通じて江戸時代には朝鮮の文化が伝えられ，友好的な関係があったことを忘れてはならない。

まとめ

この石塔について調べていくうちに，たくさんの疑問が浮かんできて，何かワクワクしたような気持ちになった。今までこういうまったくわからない，資料も少ないものについて，こんなに詳しく調べたことがなかったのでかなり手こずった。

私のテーマであるこの石塔に刻まれている4つ文字は，それぞれサンスクリット（悉曇）・篆字・漢字・ハングルであることがわかったが，このなかでもハングルの文字が日本との関係が一番強いと感じ，とくにハングルや朝鮮との交流について調べてみた。その結果，16世紀末の秀吉の「朝鮮侵略」が関係しているように思えた。しかし，そのことが関係あるかどうかについては，資料もなくよくわからなかったが，調べたなかでは重要な関わりがある出来事と思った。そして，「南無阿弥陀仏」という文字は，仏に帰依して救いを求めようとする民衆の願いと仏の行動が一つになって，平和な極楽浄土で仏になることである。それが「南無阿弥陀仏」を唱えることの意味とわかった。この言葉がもし秀吉の「朝鮮侵略」と関係すれば，石塔は日本と朝鮮との友好と平和の思いを表したものかもしれないとまとめたい。四面石塔を通じて日本と朝鮮の出来事を学んできたが，テーマを決めて調べるなかで，とくに両国には友好と交流の深いつながりがあったことを知った。

③鈴木の授業後の感想

この石塔について，たくさんの疑問があったが，資料があまりないということで，テーマをしぼるのも大変だった。さらにテーマがみつかっても資料探しに時間がつぶてれてしまった。でも段々と資料をみつけていくうちに，私の心はワクワクするような感じになった。何もわからないことに対して疑問をいだき，それを調べていくうちにいろいろなことを得るという方法は，とてもすばらしい「学び方」だと思った。

それで私のテーマ「なぜ四面に違う文字なのか」ということを調べるなかで，朝鮮との深い結びつきを知り，そこに日韓（朝）の友好や交流の関係が四面石塔にも関わるということがわかった。テーマについて調べ，段々と内容が朝鮮との関係にしぼり込まれ，最後には友好関係など今までくわしく知らなかったことを四面石塔を通じて学ぶことができたのがよかった。

（2）生徒たちの授業の感想と学習の分析

鈴木はまとめで「この石塔について調べていくうちに，たくさんの疑問が浮かんできて，何かワクワクしたような気持ちになった」と学ぶことの楽しさを印象的に語っている。多くの生徒が「調べることが大変でしたが，少しずつわかっていく喜びもあるので楽しかった。こんな授業もいい」とか，あるいは「自分で見つけて疑問となったことを調べていくことで，自分なりの結果がでるので達成感があった」と述べている。とくに「調べていくうちにいろいろなことがわかってきて・・・・次から次に調べたいことや疑問が浮かんでくるので，すごく面白くなってき」たとか，「疑問を調べていくと，もっと疑問がわいてくるところが調べ学習の面白いところ」という言葉に，生徒たちに主体的な学習スタイルを確立させていくことの重要性を強く感じた。なかでも調べ学習に入る前とその後の学習では，学ぶ姿勢が変わったという感想が目立った。

日頃，生徒に学ぶ課題を設定し，その課題追求と解決のため学習方法を教えることはない。鈴木がこの授業で「何もわからないことに対して疑問をいだき，それを調べていくうちにいろいろなことを得るという方法は，とてもすばらしい学び方」であると学んだのは大きな収穫であったろう。また「いろいろな疑問にぶつかり夢中になって調べた。さまざまなことを知る方法を学ぶことができてとてもよかった」などと，授業展開で学ぶことの意味や方法などを認識した生徒がいたことを大切にしたい。

さて，鈴木はスタート時に四面石塔を見て「面ごとに書いてあるのは，その面に対して何か意味があるのだろうか」と推定したが，資料が少ないなかでテーマの設定では「日本とそれぞれの国で何か交流があったのか」と課題をしぼった。そして，調べ学習では石塔ができた時代の出来事として，日本と朝鮮の交流の姿を「朝鮮通信使」の歴史から探っている。

「探れば探るほどいろんな謎がでてきた。そして，もっといろんなことが知り，謎を解い」ていきたいと述べた生徒もいるが，調べていくうちに「私のテーマの答えにたどり着けるのだろうか」と不安になったり，「判断する資料が乏しいという以前に，自分の歴史に対する知識の甘さを痛感」させられたと率直に述べたものもいた。歴史の謎などを探っていくような課題は，テーマ追求の姿勢を呼び起こし，認識を深化させる契機になっていくように思われた。

さらに，鈴木は「『南無阿弥陀仏』についてどういう意味で，なぜその文字なのか」という課題を追求しているが，「日本や朝鮮などが阿弥陀仏の力で皆が友好で幸せになることを願い，『南無

阿弥陀仏』と刻んだのではないか」と推論し，「石塔は日本と朝鮮との友好と平和の思いを表したものかもしれない」と仮説をたてた。

日韓の歴史や交流関係を課題にした生徒たちのなかには，「‥‥謎がでてくる石塔である。これをきっかけに，もっとたくさんの人々にその存在を知ってもらい日韓の交流を広げていけないか」とか，「僕たちが今回やったような学習が必ず必要にな」るといい，「四面石塔がこれからの日本と韓国・朝鮮との関係をもっと良くするためのきっかけの一つとなる」と，数時間の調べ学習で深めた歴史的な認識であっても，生徒なりの日韓交流の提言がなされたところを注目したい。

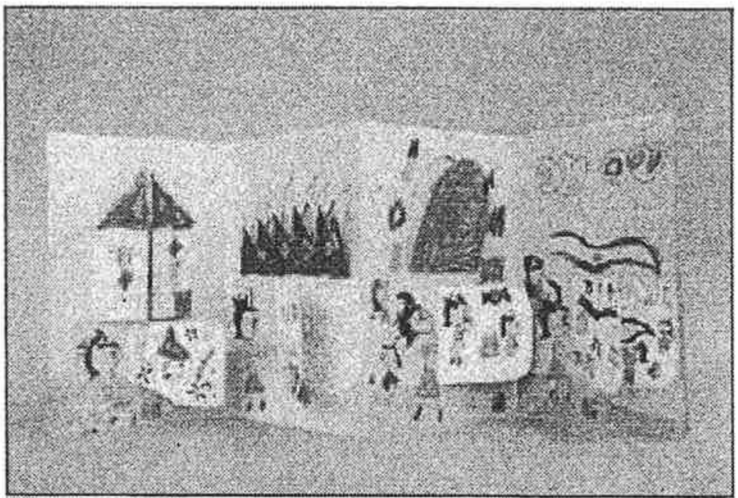
最後に，地域について生徒たちはどんな認識をもっただろうか。「ただの田舎の町としか思わず何も知らないまま，何も感じないまま暮らしてきた」だけでなく，「地域について知らないし，知ろうという気持ちももっていなかった」ことを正直に述べた生徒がいた。「地域のことを何も知らないということを思い知らされ，安房もとても立派な歴史があることを知」ったと，この授業がいま住んでいる地域を再認識する機会となったようだ。

今後，社会科学習を進めていくうえで，足元にある地域を見直す謙虚な姿勢が国際化にふさわしい歴史的な認識のベースとなることや，地域認識を深めていくことが日本の歴史を具体的に学ぶ契機になることを，次年度の歴史学習への課題として提起していきたい。

第 9 回 日韓歴史教師交流会

2001. 8. 25　ソウル

2001. 12. 26　晋州



日韓教育実践研究会

第９回日韓歴史教育交流会

発　行　２００３年1月３１日
発行者　日韓教育実践研究会
事務局　事務局　遠藤　茂 気付
〒270-0005　松戸市大谷口11-12
TEL＆FAX　０４７－３４５－３２２４
郵便振替　００１６０－０－１３１７０３

印刷　韓国ソウル京仁（キョンイン）印刷所

頒価　１，０００円